

さよならな
竜生
こんいち
は
人生9

GOOD BYE,
DRAGON LIFE

永島ひろあき
HIROAKI NAGASHIMA



目次

序章	大魔導	7
第一章	始原の七竜	16
第二章	女王陛下の想い人	82
第三章	吸血鬼狩り	122
第四章	ドラゴンスレイヤー	171
第五章	我、力を得たり	239
第六章	決着の行方	266

主な 登場人物

MAIN CHARACTERS

バストレル

魔導結社オーバージーンの
総帥にして、
最高峰の魔法使い。
大魔導の異名で
恐れられる。

アレキサンダー

始原の七竜の一柱、
アレキサンダーが人間化した姿。
ドランに対して喧嘩腰な
態度をとるが……

クリスティーナ

人間離れた身体能力と
剣技を併せ持った
絶世の美人剣士。
“竜殺しの因子”を
受け継ぐ。

ドラミナ

六つの神器を継承し、
至高の存在となった
バンパイアの
元女王。

レニーア

神造魔獣の魂を持ち
“破壊者”として
恐れられる少女。
ドランを父と慕う。

セリナ

半人半蛇の美少女ラミア。
ドランと使い魔の
契約を結び魔法学院に
同行する。

ドラン

最強の古神竜“ドラゴン”の
転生した姿。
ガロア魔法学院に通いながら
故郷ベルン村の発展に
取り組む。

序章 ——— 大魔導

アーケレスト王国から北西に遠く離れた地に、ハトリアという小さな国がある。

かつてこの地に舞い降りた邪神によって穿たれた大穴を、女神が清浄な大地を埋め込んで塞いだという伝説が残っている以外には、特に目を惹くものもない国だ。

峻険な山脈と大河に挟まれた国土は狭いが、肥沃な大地に恵まれており、農業と酪農が盛んで、国民は総じて穏やかな気質をしている。

攻めるに難く、また侵略したところでそれに見合った利益を得られない地理条件から、長らく平和を享受していたこの国は今、その歴史を終えようとしている。

当代ハトリア王国第一王女エラリナは、ハトリアという国の穏やかな国風をそのまま人間にしたかの如き、淑やかで愛らしい少女であった。

国民がエラリナ姫こそはハトリアの花、ハトリアの至宝と謳い、愛し、親しんだこの姫こそが、国の歴史に幕を引く事になった要因である。

周囲の山脈から切り出した灰褐色の石材を家屋にも道にも用いた、王都オトハの中央広場に、殺氣立った民衆が殺到していた。彼らは組み立てられたばかりの断頭台の上で拘束された少女に、血走った憎悪の眼差しを向けている。

今まさに花の茎を思わせるか細い首を鋼鉄の刃で断たれようとしている少女こそが、エラリナであった。

広場に集った数千にも届こうかという民衆から、色が着きそうなほどに濃い憎悪を浴びせられながら、エラリナは幸福な夢に浸っているかのような笑みを浮かべていた。

いずれ婿を取り、温かな家庭を築くであろうと誰もが——きつと彼女自身も——信じていた少女が、ある男に恋をした事が、全ての切っ掛けだった。

その男は、王都の外から出て花摘みをしていたエラリナの前に、気まぐれな風のように現れて一目で彼女の心を奪ってしまった。

それからというもの、エラリナは変わった。

それまで年頃の少女らしい美への関心が比較的乏しかったエラリナが、男の気を惹く為に己を美しく着飾りはじめた。

こうした変化に、側仕えの侍女や母親達は最初こそ喜びを示したが、それも短い時間の事であつた。

ほどなくして、エラリナの行動は徐々に常軌を逸しはじめる。

時折訪ねて来る男の視界に自分以外の女性が入る事を許さぬようになり、以前はまるで興味を抱かなかつた豪華な衣装や装飾品、美貌を保つ為によいとされる希少な嗜好品を、金に糸目をつけずに求めた。

父や母が窘め、教育係や友人達が諫めようともしエラリナは一向に態度を変えず、あろう事か父王を廃して自ら玉座に就いてしまう。

国政の実権を握った彼女の乱心ぶりはいよいよ加速し、国民にかつてない重税を課し、国中の年頃の女達を投獄するという暴挙に出た。

これに従わぬ者は自分の貴賤を問わず、王命への反逆として処刑を命じる徹底振りだ。連れ去られる娘に追い継ぐ年老いた父母、あるいは夫や幼子が、その場で容赦なく斬り伏せられるといった事が、国中で起きた。

武力も魔力も知力も秀でたものを持たぬエラリナが一夜にして王座に就けたのには、彼女が恋した男の助言と助力があつたからこそであつたが、凄惨な暴政に虐げられた民達はそれを知らない。

男への恋慕に突き動かされて良心の呵責を捨て去つたエラリナの専政は、わずか一年で一万人の死骸の山を築き上げた。

そして当然の帰結として、国民と生き残っていた貴族の大部分による謀反を引き起こした。

正気を失つたと思えないエラリナの行動に反感を抱かぬ者などいるはずはなく、一度事が動き出せば、彼女の身辺を守る近衛ですら謀反に加担し、エラリナは呆気ないほど簡単に拘束されて、

弁護する声一つなく断頭台の露と消える運命を決定付けられたのである。

広場にはエラリナを殺せ、家族の仇た、首を断て！ と、報復を求める叫びが木霊している。

しかし、ハトリアという国の歴史の中で最も民に憎まれ、恐怖されたエラリナは、そんな民衆の言葉にわずかも心を動かされてはいなかった。

こうしてドレスを剥ぎ取られ、粗末な服で断頭台に首を固定されてもなお、彼女の心にあったのは、一目で心を奪っていった男の事だけ。

これまでの行い全てが、彼の為だった。

エラリナは、彼の為になら一万人といわず十万人の国民全員を捧げてもなんら悔いはないと考えていた。

彼の為に何か出来る事が、どれだけ幸せであったか。エラリナは彼と出会ってからずっと幸福な夢の中を生きている。

恋を知った事で、全てがきらびやかに輝き、鮮やかな色を得た世界の中で、彼はより一層の色彩をもって存在した。

彼の眼差しを受け、言葉を掛けられ、彼の腕に包まれる自分を想像していれば、エラリナは幸せだったのだ。

そして彼女は信じていた。必ずや彼が現れて、自分を助け出してくれると。

冷たい断頭台の刃が自分の首を切り落とした時も、ゴロリと石畳の上に転がった首から流れる血

があたりを赤く染めはじめた時も、エラリナはそう信じ続け、笑顔のまま死んだ。

エラリナの首が落ちたのにわずかに遅れて、広場に集った人々は歓喜の声を上げた。突如として変貌した暴君がついに倒れ、ようやく平穏が帰ってくるのだと、彼らは心の底から喜んでいる。

そんな広場の騒ぎを、鐘楼の屋根の上から冷ややかに見つめている人影が一つ。

風に流される黒髪をそのままに、この国の王族でも手に入られない最高品質の絹で織られたゆつたりとした青い衣服で体の線を覆い隠した若い男だ。

見る角度を変えれば絶世の美女とも思える不可思議な男は、不吉なほどに赤い唇に嘲りの微笑を浮かべて、エラリナの首に槍を突き立てて晒し上げている民衆を見つめている。

首を断たれてもなおエラリナが愛し続けた男——名をバストレルという。それがこの人影の正体であり、同時に魔導結社オーバージーンの大魔術師にして人類最高の大魔法使いであった。

彼の財力や知力、魔法の業からすれば、この国に求めるものなど何もないはずなのに、わざわざエラリナを凶行に走らせたのは、ある狙いがあったからだ。

広場の民衆が歓喜と安堵の海に浸っている時、バストレルがうつすらと目を細めて一言零した。「さて、ここまでは予定通りですが……」

その言葉に刺激を受けたかのように、突如として王都一帯だけを強烈な縦揺れの地震が襲った。広場に駆けつけていた人々は例外なく倒れ、王都中の建物にも次々と罅が走って倒壊している。唯一、バストレルの立つ鐘楼だけが揺れずに聳えていた。

もしやこの地震はエラリナの呪いではないかと、一部の人々が心に黒い不安を抱く中、石畳の下から赤い粘液が堤を破る勢いで噴出しはじめた。

人々が呆然と自分達の足元を見つめているうちに、粘液は次々と彼らに襲い掛かり、呑み込んでゆく。

人々は苦悶の表情を浮かべるも、見る間に分解されて跡形もなく消えてしまった。

さながら王都を丸々呑み込む規模の超巨大な人食いスライムが出現したという事象だが、この程度でバストレルが自ら動く事はない。

次々と粘液に食われてゆく人々は、途轍もない苦痛と共に、自分達の国が古の邪神を封印した地に建国されたという事を思い出しながら、死んでいった。

「やれやれ。女神の加護を受け継ぐ王家の者を民衆に殺害させ、その血を大地に捧げる……これが封印を解除する手段とは、手間をかせさせてくれるのです」

ほどなくして王都中の人間を食い尽くした粘液は、まだ物足りないと言わんばかりに王都そのものを呑み込みはじめた。

灰褐色の石を積み上げた橋や家、城は言うに及ばず、かつて邪神を封じた女神を奉った神殿すらも粘液に呑まれて形を失っていく。

わずかに一時間と経たずに、王都の全ての生命と王都それ自体を食べ尽くした粘液は、そこでようやく満足を感じたらしい。

王都の郊外にまで広がりとつあった巨体を、エラリナの首が断られた広場を中心として集束させてゆき、側頭部から湾曲した二本の角を生やした巨大な髑髏へと変える。

鐘楼から飛び立ち、空中から悲劇を見守っていたバストレルは、姿を取り戻したソレに向けて嬉しげな笑みを零した。

この状況は彼の目論見通りのものだった。エラリナを恋に狂わせた事も、ハトリアの万を超える人々を生贄にした事も、何もかもが……

「ハトリアの地下で眠り続けていた邪神ネスタシア。かつてこの地に顕現した分霊といえども神は神。私とこの剣の試運転の相手にはちょうど良い」

バストレルはハトリアの人々やエラリナへの罪悪感など欠片も籠もっていない声で呟き、マントを翻して右手に握る長剣を陽光に晒した。

鍔の中央に円形の鏡のような物体を埋め込んだ、優美な造形の剣。

これこそ遙かなる太古に極めて高位の竜を葬った、最高位の神器と同等かそれ以上の力を秘めた恐るべき剣であった。

顕現したネスタシアは分霊であるからか、それとも数百年にわたる封印の影響か、ほとんど獣同然の知能しか持っていないようだったが、バストレルの持つ剣の脅威は分かるらしく、粘液に形作られたがらんだ目の眼窩で頭上のバストレルを見上げた。

悪意をたっぷり宿したネスタシアの視線が、バストレルの全身と魂を襲った。

高位の霊的存在の加護や魔法による守りがなければ、その場で五体が爆裂して、魂から発狂する視線に晒されているというのに、バストレルの涼しげな顔に変化はない。

真夏に涼風を浴びたかの如く、心地好さそうですらある。

「これから神器持ちと相対する予定がありますね。貴方はちょうど手頃な相手でした。色々か試したい事もありますし、少しは頑張ってくださいね、神様？」

もしネスタシアにバストレルの言葉の意味と邪悪な意図に気付ける知性があったならば、神々の被造物に過ぎない人間風情が神を試し切りの的にするとはなんたる不遜と、怒り狂った事だろう。

知性はなくとも侮蔑の感情は分かるのか、ネスタシアは天に仰ぐべき自分を見下ろすバストレルへ、ますます悪意を募らせた視線を向けた。

「おやおや、人間如きが気に食わないと言いたげですね。ですが貴方の封印を解く為に、それなりの労力を支払ったのは私なのです。少しくらい見返りを望むのは、おかしな事ではないと思いますかね」

バストレルは駄々をこねる子供を諭すような口ぶりで告げ、赤い粘液が変形した髑髏の邪神へと斬りかかっていた。

人類最強と称される自身の魔力への自信と、それ以上の剣への信頼が、バストレルの全身に溢れている。

「さあ、体を切り刻み、その上で貴方の魂を構成する魔力を頂戴いたしましょう。分霊といえど

も魔力の量は膨大。我らオーバージーンの大望たる超人種による世界統一、そして人間ではなく「人」へと進化する為の実験に役立たせてもらいましょう」

邪神すら資源にすぎないと言い切り、バストレルは剣を振り下ろした。

バストレル自身の膨大な魔力と、彼が契約している数多の邪神達の加護、そして右手にある剣が発する常軌を逸した強大な力が融合し、ネスタシアの放つ邪悪なる神気と激突する。

次の瞬間、まるで太陽がそこに落ちたかのような光が熱と爆風を伴って周囲に荒れ狂った。

そしてその日、ハトリアの王都は消滅した。

人影がなく、廃墟になったという事ではない。瓦礫一つとして残っていない、文字通りの消滅だ。

後日、様子を見に行った王都近隣の村の住人は、かつて王都が存在していた場所に、古の邪神封印の伝説をなぞらえるように巨大な穴が穿たれているのを見て、啞然と立ち尽くす事しか出来なかった。

残されたハトリアの人々は隣国へ自ら併合を申し出て、ハトリアという名前はこの地域を示すものへと変わり、国家としての歴史に終止符を打ったのである。

剣の試し切りと邪神の魔力の確保という目的を果たしたバストレルは、エラリナの事もハトリアという国の事も記憶の彼方に捨て去ったのだった。

第一章——始原の七竜

美少女ラミアのセリナと共にベルン村に帰省した私——ドランは、エンテの森に住む友人達の招きに応じて、彼らの都、ディーブグリーンを訪れていた。

都では世界樹の活性化を祝う祭典が催されており——途中、無粋な悪魔の横槍などもあったが——私達はこの滞在を大いに満喫したのだった。

村の皆へのお土産もたっぷり買い、いざベルンに戻ろうというところで、私達は思わぬ相手から見送りを受けていた。

エンテの森の大重鎮であり、私が通うガロア魔法学院の長であるオリヴィエ工学院院长と、もう一人。「ドラン様、またお好きな時にお越しくださいね。私はいつどんな時でも、貴方様を歓迎いたします」

そう言って私に微笑んだ可憐な少女は、エンテの森の世界樹——エンテ・ユグドラシルである。天を覆わんばかりの大樹である彼女は、こうして人の姿を模して我々の前に顕現するのだが、森の住人にとっては神にも等しい存在だ。

そんな彼女が直々に見送りに来たとおあって、私の隣にいるウッドエルフのフィオヤ、小さな妖精のマールは驚きのあまり目をぱちくりさせている。黒薔薇の精、ディアドラはもう慣れたものらしく、気にする素振りはない。

「世界樹殿にそう言ってもらえるとは、光栄の至りだな。エンテの森の人々とは良い関係を築きたいと常々思っているから、ありがたい事だ。それより、私達の見送りに来て良かったのか？ まだ祝祭は続いているから巫女姫殿と同調の最中だろう」

「ご懸念なく。ドラン様達をお見送りするのに支障はございません。それに彼女は今、休憩中ですもの」

エンテは耳に心地好い笑いを零すと、何も持っていない両手を差し出した。すると、そこに世界樹が放出しているのと同じ光の粒子が集中して、白い球体から翡翠色の長い葉が伸びる、握り拳大の物体が現れた。

「どうぞこれをお持ちください。以前のサイウエストと今回の件、二度も私達を災厄からお救いください。ださった事へのお礼です。そして今後もドラン様とその故郷の方々との信義と友愛に基づいた交流が持たれる事を願い、これをお贈りいたします」

受け取った物を見つめていると、それが何かを悟ったディアドラが息を呑んだ。セリナは蛇眼に魔力を通して、この物体の解析を始める。

「ううーん、なんでしょう？ びっくりするほど豊潤な魔力が詰まった植物の苗みたいですけど、

エンテの森の固有種でしょうか？」

ガロア魔法学院の大図書館にあるあらゆる植物関係の図鑑にも載っていない苗の前に、セリナは尻尾の先端と小首を傾げて難しい表情を浮かべる。

ふむ、相変わらず可愛らしい仕草をするわい。

「これは世界樹の苗だ。エンテの分身とも言えるだろう。この地上世界において樹木関係の素材でこれ以上の品はあるまい。エンテよりも成長した世界樹の苗を除けば、だが」

私がこの苗の正体を明かすと、セリナは目を丸くして驚いた。

「ええ、エンテさんの苗ですか!? 世界樹の苗なんて聞いた事ありませんよ!」

「ふふ、私からのせめてもの贈り物です。苗とはいえ世界樹ですから、植えればマナを放出します。その恩恵で土地は徐々に清められ、生命力に満たされていく事でしょう。作物や樹木の生育に一役も二役も買いますよ。それに若木になれば、枝を削って魔法の杖や魔法具の材料にも出来ます。成長にはどうしても時間がかかりますけれど……」

「ありがたく頂戴しよう。しかし世界樹から苗を直接贈られるとは、前代未聞だな」

「ふふ、ドラン様に喜んでいただけのなら、何よりです」

そう言ってエンテは無邪気に笑う。そこには一辺の曇りもなく、ただ私達の役に立ちたいという願いのみが見て取れた。

私の正面に立つエンテの頭の位置がちょうど良い高さだったので、私は笑顔につられて彼女の頭

を軽く撫でた。

「ああ、とても嬉しいよ」

私の手がエンテの髪に触れるごとに、彼女の笑みは喜びの輝きを増していく。

ふうむ、古神竜という恐ろしく古い存在である所為か、私は貴重な年上かつ格上の存在として、エンテのような者から甘えられる傾向にある。

私がそんな相手をとことん甘やかす性分である事も原因の一つとはいえ、バンパイアクイーンのドラミナに水龍皇の龍吉ときて、今度は世界樹か……

まあ、今回は私の方から頭を撫でたが、これまでの経験からエンテと会う度に甘やかしてしまう未来が容易に想像出来る。

「えへへ、幹や枝を撫でられた事はありましたけれど、頭を撫でもらったのは初めてです。こんなに心地好いものなのですね」

「喜んでもらえて何よりだ。この苗は大切に育てるとするよ。最後の最後に驚くようなお土産をいただいてしまったな」

エンテの頭を撫でている私を見たディアドラが、隣のセリナに問いかけるのが聞こえた。

「セリナ、また『むむむ顔』にはならないのかしら?」

「なんですか、むむむ顔って。まあ、心がざわつかないと言えば嘘になりますけれど、エンテさんはどちらかというと親というかお兄ちゃんに甘える妹に見えますし」

「そうねえ、ユグドラシル様は無邪気で無垢な方だし、ドラランと特に相性の良い性格の例かしらね」

私はエンテの頭を撫でるのをやめ、魔法で収納空間にしている影の中から布袋を取り出して、その中に苗を入れた。

他のお土産と一緒に影の中に仕舞うより、こうして手に持っている方がエンテの誠意に込める形になるだろう。

すると、これまで黙って私達のやり取りを見守っていた学院長が一步進み出て、小さく頭を下げた。

「ドララン、貴方のお蔭でユグドラシル様とこの森に住む人々の多くが救われました。この森の住人として、心から感謝しています。それにしても、貴方が竜の転生者であると聞いた時にも驚きましたが、よもや古神竜とは……。学院長として口にするべき言葉ではないのですが、こう言わざるを得ません。ドララン、競魔祭で他校の生徒と試合をする際は、出来る限り手加減してあげてくださいね」

競魔祭とは、王国にある五つの魔法学院の対抗試合である。

「もちろん、常日頃から人間の範疇に留まる振舞いを心がけておりますよ」

もつとも、場合によっては古神竜の力を振るう事を躊躇しないのは、言わずもがなである。

「貴方の考える『人間の範疇』がどこまでのものなのか心配ですけど、その言葉を信じましょう。

ただ、貴方の素性が分かった事で、レニアアとの関係が一層気になってきますが……」

ふむ、レニアアが神造魔獣の魂を持っていると知っては、学院長の頭痛の種がまた一つ増えてしまっただろう。

「必要があればレニアアの方から話すでしょう。それに、知る必要がない事は知らないままにしておいた方が、何かと良いものです」

そうして、私達は楽しげに手を振るエンテと、どこか物憂げな学院長に見送られて、ベルン村へと帰還するのだった。

+

さて、無邪気なエンテに素性を暴露された事も切っ掛けとなり、私はかつて同胞達と共に創り出した竜界に帰省しようとして心に決めた。

善は急げと言うし、ベルン村に戻った私は人の姿の分身体を村に残し、本体の方で竜界を目指した。

一旦、この星が丸い事を視認出来るほどの高度に転移してから、魂の情報を抽出し、白竜ではなく古神竜としての肉体を再構築する。

しかし、やはりと言うべきか、転生の影響で魂の持つ情報が劣化している為、古神竜としての肉

体が前世と比べていささかみすぼらしく見える。

「アレキサンダーの奴は、今の私を見たなら笑い転げそうだな。バハムートとリヴァイアサンは憐れむ気がするが、それはそれで辛いものがあるなあ」

ほほ確実であろう未来の予想図に思わず溜息を吐いてから、私は霊的知覚の手を高位の次元へと伸ばす。

天界や大魔界の他、精霊界や冥界など、地上世界とは次元を異にするいくつもの世界が、私の知覚に触れていく中で、ベルン村と同じく故郷と呼んでも差し支えのない——いや、ベルン村ほどではないか——竜界の存在を捕捉した。

「変わらず無事なようで、まずは何よりだな。では、久方ぶりに兄弟達と再会するでしょう」

天界や魔界と同じく、竜界は異世界からの許可なき侵入を拒絶する結界が施されているが、古神竜である私は当然問題なく通過出来る。

異なる次元に存在する竜界へと移動する為、私は周囲の空間に干渉して次元軸を竜界と同じものに調整した。

まずはこれで竜界へと転移が可能になる。

次はそこの位置に転移するのだが……やはり最初は実質的に竜界を束ねるバハムートに顔を見せるのがよからう。

バハムートは竜界の中心部に居を構えていたはずだ。

わずかな浮遊感と朝日を思わせる柔らかな光に包まれた後、私の目に飛び込んできたのは、どこまでも続く青い空と白い雲、漆黒の闇の中で無数の太陽や星の輝きが広がる夜空、そして果てなく透き通った海がつぎはぎになって構築された場所だった。

これこそが竜界。数多の星や浮遊大陸が存在しているのは大魔界とさして変わらぬが、竜種の為の世界であるから、私にとってはただいだけでも非常に心地好い場所である。

ふむ、上手くバハムートの居所にほど近い位置に転移出来たようだ。

周囲を窺ってみると、元気に空を飛ぶ神竜や、大海を回遊する龍神達の姿がちらほらと見える。

すると、私に気付いた者達が声を掛けてきた。大半は少し驚いたという反応だが、やっと来たかという響きも確かに混じっている。

「おや、ドラゴン様、お久しぶりですね！」

「ようやくお戻りですか、これでバハムート様の肩がおりますねえ」

「これでやっと始原の七竜が元通りですか」

「早くアレキサンダー様にお顔を見せてあげてくださいいな。貴方様が人間に討たれたという報せが届いた時は、それはもう大暴れされて……。バハムート様とリヴァイアサン様が止めるのに随分と骨を折っておられましたよ」

いずれも三竜帝三龍皇より格上の竜達からの言葉に逐一答えながら、私はバハムートの峙を目指して飛んだ。

ふむん、やはり竜界の者達は親密に接してくるな。

崇敬の念すら感じられる龍吉のあの態度は、長く竜界と地上の同胞達との間で交流が絶えていた所為に違いない。

「違う世界に住んでいるとはいえ同族同種なのだから、そこまで畏まる必要はあるまい。これはいつか改善するべきだな」

龍吉はリヴァイアサン系列の龍種であるし、リヴァイアサンに相談してみるのが良いかもしれない。

あるいは龍吉以外の三竜帝三龍皇達のもとへも、他の始原の七竜達と一緒に顔を見せに行くというのも妙案か。

懐かしの竜界に来て浮かれてしまったか、そんな事をつれづれと考えているうちに、バハムートの気配が感じられる巨大な浮き島が見えてきた。

私がバハムートの気配を感じているように、バハムートもまた私を察知したらしい。川が流れ、木々の生い茂る浮き島から、一つの影が飛び立って私の方へとぐんぐん近づいてくる。

光沢のある黒い鱗、二枚の翼、銀に輝く二つの眼、尻尾は一本。一般的な竜と比べると四肢が人型に近く、首もそれほど長くはない。

爪の先から鱗の一枚一枚に至るまでに満ちる力の密度と質は、同胞として誇らしくなるほど強大である。

この黒竜こそは、我ら始原の七竜と全ての竜種の実質的な長であるバハムート。

私が最後に見た時とは比較にならぬほど強くなっているのが感じられる。

心の中に懐かしさや喜びといった感情が溢れ、私はそれらを嘔み締めながらバハムートに話しかけた。

「久しいな、バハムート。我が同胞よ」

バハムートは私の正面で止まり、遙かな空で響く遠雷を思わせる、重々しい力に満ちた声で応えた。この声を聞くのも久しぶりで、私の胸中に少なからず感慨めいたものを呼び起こす。

「まこと久しきかな、ドラゴンよ。汝が死せし時は少々驚いたが、いずれまた会えると思っておつたぞ。よもや人間に生まれ変わるとは意外であつたが」

バハムートは少し笑つたようだったので、私も照れくささを感じながら笑みを返した。

流石我ら始原の七竜の長兄たる古神竜。前世の肉体を再構築した私が、人間へと生まれ変わって居る事を一目で看破したか。

「私にとつてもそれは意外だったよ。冥界に行くと思つていたのが、人間の女性のお腹の中だったのだから。実に新鮮な体験だったな」

「母の胎の中か。我を含め汝以外の兄弟達には未知の経験であるな。いささか興味深い」

「居心地の好い場所だったよ。ただただ守られ、育まれる事を享受するだけだから、必要以上に長居すると墮落してしまいそうなのが欠点だな」

しみじみと眩く私に、バハムートは面白そうに小さく笑う。

「時にドラゴンよ。ここへは自らの意思で赴いて来たようだが、このまま竜界に残るのか？ それとも再び地上世界へと帰還するのか？」

「せっかく竜界に来たのだし、他の者達の顔も見えていくつもりだ。特にリヴァイアサンには話したい事があるし、私が死んでから生まれ変わるまでの間に、何か変化があったかも聞きたいのな」
「リヴァイアサンにか？ あれならば己の海でいつも通りに泳いでおる。わざわざ汝の顔を見に来るような性格でないのは相変わらずだから、汝の方から会いに行く必要があるうぞ」

「……であるか。まあ、我が姉妹が昔と変わらず壮健であると喜ぶとしよう。ヒュペリオンやヨルムンガンド、ヴリトラやアレキサンダーはどうかかな？」

地上で多くの時を過ごしていた私と、年がら年中あちらこちらを飛翔しているヴリトラ以外は、私が死んでいる間に移住していなければ、今もこの竜界に住んでいるはずだ。

「汝が心配する必要など未来永劫ない、と断言出来るほど元気になっている。相も変わらぬ煩わしさで、いささか手に余るほどだ」

ちようどその時、バハムートにも匹敵する力を持った、懐かしくも騒々しい気配が近づいてくるのを感じた。

まったく、話の腰を折る頃合いを狙っていたのか？

私とバハムートが同時に真上に視線を向けると、空の彼方に小さな点が浮かび上がり、それが見

る間にこちらに近づいて大きくなる。

その正体は、私の六柱いる兄弟姉妹のうちの一柱、十翼一頭二尾金眼銀鱗の古神竜、貫けぬものなきアレキサンダーであった。

始祖竜の牙より生まれたこの古神竜は、ある程度近づいてきたところで十枚の翼を大きく広げ、金色の瞳に私を映す。

「アレキサンダーか。騒々しいのが来たな」

「順当なところだろうよ。ドラゴン、久方ぶりに顔を合わせる妹ぞ。きちんと相手をしてやるが良。アレはなんだかんだで、我らの中では汝に最も懐いておる故」

バハムートのありがたい忠告を背に、私は重く感じられる腰を上げてアレキサンダーのもとへ飛び立つ。

銀の鱗と金の瞳という豪華絢爛な姿を持つアレキサンダーは、空間の一部を固着させた足場を作り、その上に立って私の姿を頭のとっぺんから尻尾の先までしげしげと眺めた。

「アレキ……」

「く、くはははははは、な、なんだその姿はっ！ 随分みすばらしくなったな!!」

「……サンダー……」

まずは挨拶からと呼びかけた私の言葉を、アレキサンダーのけたたましい騒音めいた爆笑が遮る。私とて、大地母神マイラールやバハムートの目に転生した後の魂を晒す事に羞恥を感じたが、流

石に出会い頭に笑われては気持ちの良いものではない。

アレキサンダーは本来は金鈴を天上世界の楽師が鳴らしたかのような美しい声なのだが、それがこうもけたたましい笑い声をあげると、可愛さ——もとい、美しさ余って憎さ万倍に感じられる。「お前は相変わらずだな。顔を合わせた途端に同胞を笑い飛ばすなど、粗野な性格がまるで直っていない」

「くくく、なんだ、皮肉のつもりか？ しかし、これは笑うなと言う方が酷だぞ、ドラゴン。自らの愚かさ故に人間に殺されてやった挙句に、その人間に生まれ変わって斯様なみすぼらしい姿になるなど、とんだ喜劇ではないか。これを笑わずしてどうする？」

バハムートやマイラー、カラヴィスは笑わなかったわい——と、心中で一つ零して、私はアレキサンダーを睨む。

「おお怖い。バハムートが何やら急いで動いたかと思えば、お前がここに顔を出していたとはな。まあ、許せ。笑った事は謝ってやる。……ふん、なんだドラゴン、随分と不服そうな目をしているな？」

「当たり前だ。生まれた当初よりの付き合い故、お前が変わらず壮健である事はまこと喜ばしいが、そのような物言いは相手を不必要に不快にさせるから改めると、何度となく忠告したのを忘れてたか」

「私がそれに従う義理はない。我らは同胞であって、どちらが上でどちらが下という関係ではない

のだからな。もつとも、お前は転生した所為で随分と酷い有様だが」

「ふむ、そこまで言うなら、今の私の力を一度味わってみるか？」

「くつくく、あまり威勢の良い言葉を吐くなよ、ドラゴン。お前が我らの中で最強を誇ったのは、肉体を失う前の話よ。今のお前に一体どれだけの力が残されているというのだ？」

「お前にその認識を改めさせる程度の力は残っているつもりだ。我が妹よ」

「面白い。今のお前の力がいかほどか、このアレキサンダーに知らしめよ、我が兄弟よ！」

「やめい、二人とも。何を喧嘩腰になつておる」

火花を散らしはじめた私達を、バハムートが呆れをたっぷりと含んだ声で制止した。

バハムートはふわりと柔らかに翼を動かして私とアレキサンダーの間に割って入り、異を唱える事を許さぬ力強さを湛えた瞳で私達を交互に睨む。

「まったく、相手をしてやれと言った矢先にこれか。ドラゴンよ、いささか短慮にすぎるぞ」

「いや、面目ない。アレキサンダーとじゃれるのも久しぶりなもので、ついな」

バハムートから言われたばかりだというのに、それをすっかり忘れていた事に、私は申し訳ない気持ちでいっぱいであった。

かつて竜界にいた頃は些細な事でアレキサンダーとやりあったもので、その時の事を思い出してついつい喧嘩を買ってしまった。

「邪魔をするな、バハムート。最も愚かな同胞に躰をしてやらねばならんだ」

アレキサンダーが青立ちを露わにしたが、バハムートはさして気にも留めず、これを言葉で制した。

「アレキサンダーよ、久方ぶりに兄に会えて嬉しいのは分かるが、ほどほどにせよ。ようやく再会を果たせたのだ。もう少し穏便に事を進めようとは思わんのか？ ……まあよい。我とドラゴンはリヴァイアサンの所へ向かう。お前も来るか？」

ふん、とアレキサンダーはそっぽを向いたが、明確な拒否はしなかった。同行するつもりらしい。しかし改めて見ると、アレキサンダーは深紅竜のヴァジェエのように、なんだかんだ言いつつ構ってほしい性格だな。

もつとも、ヴァジェエよりも遙かに強いので、そう簡単に拳骨で黙らせられないという点が大きく違うし、ヴァジェエはあれでも素直で可愛げがあるからな。

「バハムートよ。お前こそ何か言いたい事があるのではないのか？ 見ろ、こやつのみすばらしい姿を。これがかつて我らの中でも最強と謳われたドラゴンか？ これでもまだ、天界魔界の神などと僭称する奴らならば足元にも及ぶまい。しかしかつての姿と力を知る我らの目から見れば……なんだこの有様は！」

アレキサンダーはまだブツブツと文句を呟き続ける。

「そこまでにせよ、アレキサンダー。それにドラゴンの事情を考えれば、弱くなっているのも無理はなかるう」

「それもこれも、ドラゴンが人間風情に負けてしまった所為ではないか。全てはこいつの自業自得なのだから、それを嘲り笑おうと、非難される謂れはない」

堂々と胸を張って、一切臆することなく自分の意見を述べるアレキサンダーに、本当にこいつは変わらん——と、私は嬉しさと呆れをない交ぜにした声で応えた。

「お前は我らの中で一番性格が悪いな、アレキサンダー。憎まれっ子世に憚るとも言うし、我らの中ではお前が一番長生きするのだろう、ふむん」

「はっ！ ドラゴン、私達の中でお前が例外だったただけだ。お前以外の兄弟が減びる姿など、私はこれっぽっちも想像出来ないな」

「ふむ、それは、私も同意かな。私以外の者達は時の流れの果てた後でさえも元気だろう」

ある程度私への罵詈雑言を口にしてようやく気が収まったらしく、アレキサンダーは口を閉ざした。

さて、これから向かうのはリヴァイアサンが住まいとしている海だ。

竜界の中には、無数の海が全てを占める惑星などが幾つも浮かんでおり、その中でも、リヴァイアサンの住まいの海が最も巨大である。竜界で単に「海」と言う場合は、彼女の住まいを指す。

リヴァイアサンのもとへと辿り着くのには、さほど時間はかからなかった。

彼女の住処は巨大な円盤型の海である。

青く澄んだ海の中に珊瑚の大陸があり、海水を吸って育つ樹木や花々が海面や海中を問わず咲き

乱れている。なんとも艶やかで色彩豊かな海だ。

膨大な量の海水は決して周囲の空間に流出する事なく回流し続け、一つの完結した世界として成り立っている。

リヴァイアサンばかりでなく、その系譜に連なる多くの龍神や真龍達が共に住んでいるのは相変わらずで、無数の同胞の命の息吹が感じられる。

リヴァイアサンは私達七竜の中でもバハムートに次いで竜界全体に強い影響力を持ち、その眷属の数も多い。

途方もなく広大な海を見下ろす私に気付いて、リヴァイアサンが海中に身を沈めたまま念話で話しかけてきた。

懐かしさに思わず目元が緩む。

『あな懐かしや。永い事顔を見せなかつた放蕩者の兄弟が戻ってきたか』

からかうような言葉の中に、本当に親しい者にだけ込める親愛の情が混じっている。

もしリヴァイアサンの声音を耳にすれば、地上の詩人は感嘆して自らが綴った詩を全て捨てて、楽師はこの声よりも美しい音を奏でる事が出来ずに絶望するだろう。

天地海の全てを支配する大天帝といっても通用する威厳を持ち、同時に絶世の美女である事を声だけで理解させるのが、リヴァイアサンであった。

『まるで母のような物言いをするな、リヴァイアサンよ』

『帰ってきたかと思えば、すぐさまアレキサンダーと熱をあげてバハムートに窘められるような悪童なれば、子供扱いをするのが妥当じゃ』

『そう言われると反論も出来ぬな』

『じゃが、そんな悪童でも妾の大切な兄弟である事に変わりはない。随分と時は掛かったが、そなたと再び会えた事を寿ごう。妾はアレキサンダーと違つて素直な性分故な』

『そう言うリヴァイアサンの思念は、どんなに心の荒んだ者でも安らぎを覚える、大いなる包容力があり、無限の母性を感じさせた。』

バハムートが我ら竜種の父ならば、さしずめリヴァイアサンは母だろうか。アレキサンダーが我儘な末娘で、私は自由気ままな次男坊あたりかね。

『妾の事を母など思つておるな、ドラゴンよ』

『なんだ、読心の術でも使つたのか？』

『そなたは我らの中でも一番素直で嘘が吐けぬから、顔を見るだけで何を考えているかはおおよそ分かる。まったく、失礼な奴じゃ』

『確かに、いかに兄弟姉妹とはいえ、女人に対していささか配慮の至らぬ事を考えていたか。気分を害したのなら謝ろう』

『よいよい。それほど狭隘な心は持つておらぬ。して、何か妾に言いたい事があるのであるか。大概の事なら怒りはせぬから、素直にお言い。それとも、言うのが憚られる事なのか？』

まさしく我が子に失敗を告白させようとする母のようなリヴァイアサンの言葉であった。

リヴァイアサンが気を利かせて促してきたのだから、ここは素直に従わねばならぬな。

『ふーむ。実はな、そなたの子孫で地上に降りた者の中に龍吉という女龍がおるのだが、私は今その龍吉と縁を結んでおる』

『おお、龍吉とな。見知っておるとも。あれは地上に降りた私の眷属の中でも血と力を濃く継いだ系譜の者。最後に見た時はまだ鱗の固まりきっておらぬ幼子であったが、今ではさぞや美しい女龍となっておろうな。そういえば、龍吉は幼い頃にそなたと会った事があったか。転生した先で縁があるとはいささか驚きであるが、そなたと知りあう事が出来たのなら、海魔共とのいざこざなど心配は要らぬな』

『海魔の件はついこの間、決着をつけてきたばかりだよ。なに、話というのはそう難しいものではない。龍吉は私がドラゴンと知って最大限の礼を尽くしてくれているのだが、それがいささか過剰でな。他の始原の七竜と地上の同胞達との付き合いはどうなっているのか、ちと気になったのだ。私が生きていた頃と変わらぬままか？』

言葉を交わしているうちに、眼下に広がる海面の中心部に、リヴァイアサンの影がうつすらと浮かび上がる。

私達にとって体の大きさは自在に変えられるものだからあまり意味はないが、それでも普段は自分が過ごしやすい大きさを取っている。

リヴァイアサンは頭のとつぺんからふさふさの毛に包まれた尻尾の先まで、ざつと山を一巻き出来るくらいの大きさを選んでいった。
透明な水の滴を全身に纏い、青い鱗を煌びやかに輝かせながら、リヴァイアサンは私に顔を向けた。

「そうさな、特別な用事か火急の事態にでも陥らねば、我らから地上に出向く事はない。お主が生きておった頃と変わらぬよ」

「そうか。君達も行ってみれば分かると思うが、どうも地上の同胞達は竜界に住む私達の事を過剰に美化している傾向がある。そういった誤解や認識の違いは解消しておいた方がよいのではないかと思案している。適当な時期を見計らって、バハムートか君あたりが一度地上に降りて、同胞らと顔を合わせてみてはどうかかな？」

「ほう、地上の同胞のもとへか。久しく地上へは赴いておらぬから、どう変わっておるか確かめる為に行くのも一興かもしれないぬ。バハムートよ、お主はいかがか？」

「我は構わぬ。ドラゴンがいる以上、地上の者達が危機に陥る事はあるまいが、同胞達が我らをどのように思っているのか、確認するのは悪くない」

バハムートとリヴァイアサンが思いの外あっさり承諾してくれたのは、嬉しい誤算である。

しかし、彼らにつられてアレキサンダーまでも話に乗ってきてしまった。

「私も地上に行ってやらん事もないぞ」

「お前は別にいい」

「なん——!? お前、私にわざわざ足を運んでやろうというのに、なんだその素っ気ない反応は」
「リヴァイアサン達は地上の同胞達が思い描く始原の七竜そのものだからよいが、お前は彼らを必要以上に幻滅させそうだからな」

「何を言うか、私とて始原の七竜に連なる者だ。敬いへつらい奉られるのに、なんの不足がある!?」

「色々あるが、とりあえずは品性だな」

私の答えにリヴァイアサン達も頷くものだから、アレキサンダーはこの場に味方がいないと悟ってぐむむと唸りはじめた。

ふうむ、アレキサンダーとのこういうやり取りも実に懐かしい。やはりこの竜界もまた我が故郷の一つなのだ、私はしみじみと感じていた。

私は頭に血の上りやすい妹をこれ以上からかうのは得策ではないと判断し、話の流れを変える事にした。

やり過ぎて、こやつが感情を爆発させるような事になっては厄介だ。血が繋がっているというわけではないが、今も昔も面倒な妹である。

「まあ、アレキサンダーが変わっていないという事は、この短時間でよく分かった。そろそろ他の兄弟達にも顔を見せたいが、皆は今どうしているのだね？」

実質的に竜界の管理者としての役目を担っているバハムートに問いかけると、淀みなく答えが返ってきた。

「ヒュペリオンは相変わらず眠り続けているが、以前寢床を変えてから同じ場所に留まったまま故現在の居場所を把握している。ヴリトラもヨルムンガンダムも皆何一つ変わってはおらぬ。ヴリトラは竜界だけでなく様々な世界をずっと飛び回っているが、呼べばすぐに来るであろう。ヨルムンガンダムは既に我らを視ているはずだから、呼ぶまでもない。となれば、ヒュペリオンの所に足を延ばせば自然と皆が集まるだろうよ」

「ふむ、私も同意見だ。では、私の帰郷ついでに兄弟勢揃いといこうではないか」

「ヒュペリオンの顔を見るのも久しぶりなものよ。ヴリトラといい、ヒュペリオンといい、妾の兄弟には極端な性情の者がいる事……。もつとも、あえて人間に討たれる事を是としたお主ほどではないであろうかの。のう、ドラゴン？」

「リヴァイアサン、そう言ってくれるな。それに兄弟が揃って似たり寄つたりの性格をした者ばかりでは、味気ないだろう」

「否定はせぬが、妾に奔放なお主らの躰寄せが来るのは、勘弁してほしいものよ。お主が死んだ時など、そのアレキサンダーが騒いで騒いで、それはもう姦しかった。のう、アレキサンダー、あの時のお主は——」

アレキサンダーは私に知られたくない事でもあったのか、ひどく慌てた調子でリヴァイアサンの

言葉を遮る。

「あわわわ、私の事はどうだったいい。その間抜けが死んだ時の事などわざわざ話さなかったっていいじゃないか！ここで無駄口を叩く暇があったら、早く寝ぼすけのヒュペリオンの所に行こう、なあ、そうしよう！よし、行くぞ、私は行くからね！」

私達が止める間もなく、アレキサンダーは銀に輝く翼を広げると、竜界に満ちるエーテルや魔力を捉えて光よりも速く飛んでいった。

小さくなってゆくアレキサンダーの後ろ姿を追い掛けながら、私は呆れの言葉を口にしていた。

「なんだ、あれは？突拍子もない行動はあれの専売特許だが、どうしたと言うのだ？」

リヴァイアサンは小さな笑いを噛み殺しながら、要領を得ない返事をした。

「ふふふ、なに、お主はまだ知らなくてもよい事だ。上手くすればお主の人間としての寿命が尽きるまでに、アレキサンダーの態度の理由を知る事が出来よう」

「ふむん」

バハムートもその理由を知っているらしく、どこか疲れた溜息を吐く。

「我としてはさっさと知ってもらいたいところだ。そうすればアレキサンダーも少しは落ち着いて、我に要らぬ苦勞を山と押し付けてくる事も減るであろうよ」

竜界での採め事の仲裁や各竜達から相談を持ち掛けられる立場にあるバハムートにとって、同格の存在にもかかわらず厄介事の大量生産機でもあるアレキサンダーは、格別に手の掛かる問題児に

違いな。

痛切ささえ滲むバハムートの嘆きに、私は同情を禁じ得なかった。

相変わらずそなたは苦勞をしているのだな……

誰に命じられて相談役やまとめ役をしているわけでもないのに、まったくもって損な性分をしている。

前世では地上に降りてからあまりこちらに戻らなかつたが、これからは分身体でも顔を出して、バハムートの手伝いくらいはするべきかもしれん。

「さりとてこれはアレキサンダーが己で解決せねば意味のない事。ドラゴンよ、お主に我らから知らせても、良い結果を齎すとは思えぬ故、アレキサンダーの態度が変わるか、お主自身が気付くかする事が肝要ぞ」

「まるで謎掛けだな。まあよい。急いで答えを求めねばならぬ事でもあるまい」

一旦この話題を切り上げた私達は、アレキサンダーの後を追って、寢床を変えずに眠り続けているヒュペリオンのもとへと向かった。

竜界に無数に浮かぶ大陸や惑星などは、特に誰のものとも決まっているわけではない。おのおのの気分次第で好きな場所を寢床とする傾向にある。

ヒュペリオンがずっと寢床を変えずにいるという事は、元来の睡眠を好む性格もあるが、相当寢心地が好い場所を見つけたのだろう。

道すがら、私は記憶の中にある竜界と変わっていると気付いて、その変化を観察していた。竜界は我ら竜種が創り出した竜種の為の世界である。だが、私達以外の生物も存在している。

天界や魔界と同じ高位次元に位置する竜界に、三次元や四次元などに属する地上の生物達や精霊、精神生命体の類がそれなりにまとまった数で居を構えているのだ。

当然、彼らは元から竜界に住んでいただけではない。

神々の戦いの影響や何かしらの事情で故郷を失った者達、あるいは絶滅の危機に瀕した生物などを憐れみ、余っている土地を快適な環境に作り変えた上で竜界に引き入れて保護する、といった事が、私の知る限りでも何度か行われている。

ある程度時間が経過した後、元の世界に帰す事が多かったが、中には竜界にそのまま残って暮らしたいと望む者達もいた。

興味本位で現在の竜界を軽く探知してみたところ、竜界の外から保護した亜人や妖精、人間種が築き上げた文明がいくつも確認出来た。

私が暮らしている地上世界と同程度の文明もあれば、地上を離れた高高度に人工の大地を作って暮らせる程度に発達した文明も散見される。

「私が最後にいた頃と比べると、随分と賑やかになったものだな。竜界の居心地が好すぎるのかね？」

「そうかもしれぬ。故郷に帰る事を拒む者も多少はいたからな」

こういった他世界から保護した者達の世話や仲介なども、大元締めは自分が担っている事もあって、バハムートはどこか誇らしげに見える。

日頃の彼の苦勞に対して、称賛や労いの声を掛ける者はほとんどいないだろうに、よくも不貞腐れずにいられるものだ、とついつい感心してしまう。

あるいはバハムートにとってはこれが生き甲斐になっているのかもしれない。先行するアレキサンダーが緑に覆われた惑星に降り立ち、私もそれに続いた。

緑の正体は惑星表面を覆う苔で、他には木の一本はおろか草の茂みすら存在しない。苔生した岩と土だらけの大地には、ところどころに澄んだ青に染まる湖などがあるきりで随分と寂しげな風景だ。

風の音以外には静寂が支配しているこの惑星で、ヒュペリオンは眠りに就いているのだという。アレキサンダーは惑星に降り立った後、惑星表面に走る無惨な刀傷を思わせる亀裂の中へと進む。私達も亀裂の端に触れぬように体の大きさを調節しながら降下していく。

私人間として生まれた惑星だったら、マグマに突入するくらいの深度まで潜ると、内側に薄紫色の煌めきを閉じ込めた水晶に囲まれて眠る巨大な龍の姿が見えた。

かつて孤独に耐えきれずに己が身を引き裂いた始祖竜の尻尾から生まれし者。

四翼一頭一尾零眼紫鱗の古龍神、全てを押し壊す、ヒュペリオン。

それが、私達の目の前で昏々と眠り続ける龍の名前であった。

しかしまあ、私の気配に気付いて目を醒ますかと思えば、こうして私達兄弟が来てはまだ眠り続けているとは、いやはやヒュペリオンの眠り好きは相変わらずだな。

先にヒュペリオンのもとに到着していたアレキサンダーは、健やかな寝息を立てているヒュペリオンにカチンと来たらしく、少しばかり苛立ちを含んだ声を出す。

「おい、おい！ 良い夢を見ているのか悪い夢を見ているのか知らんが、起きろ。最近まで死んでいたドラゴンの奴が、殊勝にも顔を見せに来たぞ。起きてみすばらしくなったドラゴンの顔を拝んでやれ」

まったく……口が悪いなあ。

ふうむ、本当に痛い目の一つ二つに遭わせて、躰をしてやろうかね。

アレキサンダーの乱暴な呼びかけを受けて、深い眠りに就いていたヒュペリオンが、かすかに身じろぎした。

ほどなくして、首を持ち上げたヒュペリオンは、大きく口を開き、はしたなく欠伸を零してから、閉ざしたまの目を私達へと向ける。

高純度のオリハルコンを砂糖菓子のように容易く噛み砕く牙の奥から聞こえてきたのは、少年とも少女ともつかぬ澄んだ声音だった。

「ふわあああ、なんだい、アレキサンダー？ 相変わらず君は騒々しいなあ。言われなくっても起きるよ。ふあ……やあ、ドラゴン。随分と久しぶりになるかなあ」

「久しぶりだな。二度目の生を得たので顔を見せに来たよ」

「うん、そうみたいだね。今の君は……へえ、人間に生まれ変わったのかい？ 人間は君と一番関りの深かった生き物だね。これも因果というものかな？」

ヒュペリオンはバハムート同様に、私が人間に生まれ変わった事を一目で看破してきた。

瞳がないのに何が見えているのか、ヒュペリオンは昔から視力の有無をまるで感じさせない言動を取る。

「かもしれないな。運命を司る三女神でもその因果の糸で我らを絡め取る事が出来ない以上、何者かの意思が働いたとは考えられんがね」

「そうだねえ。ふああ、まだ眠たいけれど、せっかく君が来てくれたのなら起きなきゃ失礼かな。よいしょ」

ヒュペリオンは横たわっていた紫水晶の寝床から長い体を起こし、ふわりと浮かび上がる。

「ヴリトラやヨルムンガンドとの顔合わせはまだかい？ いや、両方ともここを目指して来ているみたいだね。じゃあ、上の方に行つて兄弟達が来るのを待とうか……ぐう」

「こら、起きた傍から眠るな」

話している最中に寝息を立てはじめたヒュペリオンは、はっと顔を上げてはにかんだ笑みを浮かべた。

「やあ、ごめんごめん。宇宙が生まれて消えるまでの時間くらいは眠っているつもりだったから

ね、どうしてもまだ眠り足りないのさ」

このヒュペリオンの緩い感じは、どことなく級友のファティマを連想させるものがある。

私がファティマに対して強い親近感を抱くのも、彼女自身の人徳に加えて肉親と言えるヒュペリオンと相通するものを感じていたからだろうか。

今度こそはつきりと目を醒ましたヒュペリオンを伴って亀裂を出て、私達はこの惑星の地表で他の兄弟達が来るのを待つことにした。

再会した四柱全員が、私の記憶の中の姿と全く変わっていない。この分では残りの兄弟達も変わらぬままであろう。

変わったのは私だけか——などと考えていると、それぞれ反対の方向から、残る兄弟達がぐんぐんと近づいてくる気配を感じた。

始原の七竜を含めた全ての竜種の中で最速を誇るヴリトラと、始祖竜の瞳から生まれて混沌の全てさえ見通すと言われるヨルムンガンドだ。

先に私達の前に姿を見せたのはヴリトラであった。

ヴリトラの全身は深い緑色の鱗に覆われ、翡翠が色褪せて見えるほどに鮮烈な翠の瞳を持つ。背に十二枚もの翼を広げ、臀部からは八本の尻尾が伸びている。

背の翼の皮膜はほとんど無色に近く、ヴリトラはこの十二枚の翼が生み出す速度によって、何よりも速きヴリトラと称されていた。

しかし困った事に、この姉妹殿は一箇所に留まるといふ事をしない性分の持ち主だ。

私達の目の前まで来ても止まる事なく、風を切って惑星を周回しはじめた。

開口一番、ヴリトラは十代半ばから後半の闊達な少女を想起させる声で挨拶してきた。

「ドラゴン、久しぶり！」

と、にこやかに声を掛けてきた時には既に惑星の裏側に回っており、そこからまた私達の前まで来たところで……

「ちよっと小さくなった？ 遅くなった？ それとも小さく軽くなったから速くなった？」

……と言って、また二周目に入るといふ、なんとも面倒な会話の仕方をしてきた。

まあ、これは今に始まった事ではなく、私達兄弟からすれば慣れたものだ。

一瞬しか目の前に居ないヴリトラに直接声を掛けるのではなく、思念を飛ばして会話をするといのが彼女との意思疎通の基本だ。

私は言葉を口にするのと同時に念話を飛ばしてヴリトラとの会話を続けた。

「あまり変わらぬと思う。ヴリトラ、無理に話そうとしなくても、今まで通り思念を飛ばしてくればそれでいいぞ」

ひよっとして、ヴリトラが直接声を掛けてきたのは、久しぶりに私の顔を見て嬉しいからだろうか。

『あ、そう？ じゃあそうするね！ ヒュペリオンはもう起きているみたいだから、後はヨルムンガンドだけだね、遅いね、遅いよね？』

ヴリトラは即座に快諾の返事をよこしてきた。

「たまたま居た場所が遠かっただけの事だろう。それに、君と比べてしまえば全ての存在が遅いのは自明ではないか」

『まあね！ ボクがいつちばくん速いだもん！』

えへん、と胸を張っている様子が容易に想像出来る思念が伝わってきた。

始祖竜の翼から生まれたヴリトラは、速さに関しては自分が一番でないと我慢出来ないという子供っぽい性格で、私達同族のみならず、神々や神獣などを相手に速さ比べを挑んだ逸話が数え切れないほどある。

こうして見ると、アレキサンダーといい、ヒュペリオンといい、ヴリトラといい、我が兄弟達はなんとも個性的というか、どこか精神が幼く未成熟なところが目立つものだと思いきらされる。

その分、バハムートとリヴァイアサンが成熟していると考えるべきか、はてさて。

「君も変わらん。最後に竜界を訪れた時からまるで時間が経っていないかのようだ」

しみじみと呟く私に、バハムートが応じた。

「広い視野で見れば、良く悪くも変化に乏しいのが我らの世界だ。それでも細かく見れば同じ時は決して流れておらぬし、微細に変わり続けている。しかしドラゴンよ、お主は人間に生まれ変わっている。定められた命を生きる人間としての感性があるならば、時の流れは生まれ変わる前よりも速く感じられるのではないか？」

「そうさな、人間として生を受けて十六年、あつという間に過ぎたように感じていたが、それも竜であった頃なら瞬きをするくらいの間だ。ふむ……そうなると、私の時間の感じ方は大分人間に近づいていると言えるな。おっと、ヨルムンガンドも来たか」

私達が話をしている間に最後の兄弟が姿を見せた。

地面に降りていた私達の頭上でヨルムンガンドが停止し、彼の落とす影が私達を呑み込む。

七翼六頭十尾黒眼灰鱗の古龍神、涯と頂を見通す、ヨルムンガンド。その名前が示す通り、細長い龍の体の左右に六枚の翼が生え、背中の中心に七枚目の翼を持つ。

翼に皮膜はなく、代わりに体と同じ薄い灰色の鱗で覆われている。

六つの頭のそれぞれに一つずつの瞳があり、尻尾は十に枝分かれしているなど、その姿の異様さは始原の七竜の中でも頭一つ抜けていた。

ヨルムンガンドは黒い輝きに染まる六つの瞳で私を見て、六つの口で同じ言葉を発する。

「久しぶり、とは皆が口にしていよう。ドラゴン、また会えて嬉しいぞ」

抑揚が乏しい中にも喜色の滲むヨルムンガンドの声に、私は肉親に対する親愛の情を感じて、思わず口元を綻ばせた。

「私もさ。前は久しく顔を見せていなかったが、改めて兄弟というものの良さを知ってね。無沙汰を反省しているところだ」

これは無論、人間としての兄弟、ディラン兄とマルコのお蔭である。

ヨルムンガンドは重力を感じさせぬ柔らかな動きで降下してきて、ちょうどヴリトラを除く私達六柱で車座になる。

「ドラゴンにしては殊勝。それにしてもアレキサンダー、良かったな。ドラゴンがこうして顔を見せに来てくれて」

ヨルムンガンドがアレキサンダーをからかえば、末の妹は実に分かりやすい態度で六つ頭の兄龍に抗議する。

「べべべ、別に喜んではいない！ いないぞ」

アレキサンダーがあからさまに動揺する姿を見て、私以外の皆が大小の笑いを零す。惑星周回百周目に入ったヴリトラも例外ではない。

「笑うな！」

アレキサンダーはすっかり機嫌を損ねてしまい、恥ずかしさを誤魔化すかのように顔を逸らしていかにも自分は怒っているぞ、という態度を取る。

こういう反応をするから私達にからかわれて、末の妹扱いをされるのだと、アレキサンダーだけが理解していない。

「そういえば、今は人間に生まれ変わっておるのである？ どのような姿を御母堂から授かっておるのかの？」

人間としての私について問いかけてきたのは、リヴァイアサンだった。

始原の七竜の中で母親ないしは長女としての役割を担う彼女は、生まれ変わった私の姿や生活などが気になるらしい。

そのような事を問われるとは思ってもいなかったが、人間としての姿を見せる事になんの問題も躊躇もない。

リヴァイアサンの言葉を皮切りに、他の兄弟達も私に好奇の視線を寄せた。ヴリトラまでも惑星を周回するのをやめて滞空している事から、興味の強さが窺える。

あまりに注目されると少しこそばゆいが、乞われるままに古神竜としての肉体を分解して、今回の生で賜った本来の人間としての姿を兄弟達の前に晒した。

私の古神竜としての肉体の輪郭がぼやけ、一瞬で鱗も翼も肉も骨も白い光の粒子と化して崩れ、それが人間の形へと集約される。

父親譲りの黒髪に、母親譲りの青い瞳。人からは「まあまあ」と評価してもらえる顔立ちである。肌はよく陽に焼け、体は日頃の過酷な農作業と節制によって引き締まっている。

「とりあえずこのような肉体を賜っている。なかなか過酷な環境に生まれ育ったが、周囲の人々には恵まれていてね。とても充実した生を過ごしている」

巨体を誇る兄弟達と比べると遥かに小さくなった私の姿を、皆がしげしげと眺める。

そんな中、ヴリトラはケタケタと心底からの陽性の笑い声を上げると、緑と翡翠二色に彩られた体を変化させはじめる。

「ドラゴン、人間だね？ 人間だ！ あはは、小さく。せっかくだからボクも人間になろうおつと。お話をするときはおんなじ目線じゃないと失礼なんだよね？ 見下ろしてお話するのはよくないもんね。えい！」

どうやら私と同じように自分を人間に変化させるつもりらしい。

十二枚の翼も緑の鱗に覆われた巨体も私同様一旦光の粒子へと分解されて、刹那にも満たない短い時間で、ヴリトラの体があった場所に小柄な少女の姿が現れた。

うなじに掛かる髪は鱗と同じ深い緑、くりくりとよく動く大粒の瞳は翠。

小麦色に焼けた肌を持ち、四肢の付け根が露わな紺色の簡素なシャツと赤いショートパンツという出で立ちだった。

「んん、地上の生物の姿になるのは何年ぶりかなあ、一万年？ 一億年？ あははは、忘れてちゃった」

ヴリトラは人間に変化させた肉体の調子を確かめるように、その場でせわしく足を上下させたり、何度も兎みたいに跳ねたりする。

生命力に満ち溢れた闊達な少女にしか見えないが、こと速さにおいては全盛期の私でも後塵を拝する強大な古神竜である事には変わりはない。

「ほらほら、皆も人間になりなよ。せっかく兄弟が揃ったんだし、人間に生まれ変わったドラゴンに合わせるのも面白いよ」

「なんで私達がドラゴンなんかに合わせてやらねばならんのだ」

ヴリトラからの提案に明確な反対の意思を示したのは、アレキサンダーだけだった。

ヒュペリオンは随分乗り気な様子である。

「ふふ、いいじゃない。大した手間でもないんだし、たまには違う姿になるのも面白いかもね」

「しかし我らは竜だぞ。あるべき姿を変える必要などなかるう」

「それを言ったら、ドラゴンはもう人間に生まれ変わっているのだから、古神竜としての姿は在るべき姿ではないよお。わざわざぼく達の為にさっきまで昔の姿をしてくれていたんだし、だったらぼくも合わせて姿を変えるくらいはしてもいいんじゃないかなあ？」

ヒュペリオンは淀みなく反論を述べると、この眠りたがりには珍しく迅速に行動に移り、人間の姿へと自身の巨体を変化させた。

瞬く間に変化が終ると、そこには十歳そこらの子供姿のヒュペリオンが立っていた。

龍体の鱗と同じ紫色の髪は先端にいくにつれて内側に巻く癖があり、華奢な体の左右を流れて、まるで紫色の百合の花がヒュペリオンを包んでいるかのように見えた。

凹凸のない流麗な線を描く体に、刺繍も柄も一切ない膝丈の白いワンピースを着ているのみで、傷一つない細い足と爪先は剥き出しになっている。

瞼こそ閉じたままだが、ほのかに桜色に染まった頬や、花びらがそのまま変わったかのような小さな唇、触れれば簡単に壊れてしまいそうなほど繊細で、硝子細工を思わせる儂げな雰囲気は、

ヒュペリオンを絵画の中にも存在し得ない美少年、ないしは美少女へと仕立てあげていた。

子供嫌いの者でも一目で魅了^{みりょう}してしまいそうなくらいに可憐で、現実にはあり得ない存在だと思わせるほどだった。

そういえば、昔からヒュペリオンの性別は謎だったな。男か女か、はたまた両性^{りょうせい}具有^{くわう}か。大した問題ではないから言及した事もなかったが、実際のところはどうかのだろうか？

「ああ、こっちの体の方が小さいからいろんな場所で眠れそうだねえ……ぐう……」

「ヒュペリオン、話している最中に眠るのは禁止」

地べたで眠ろうとするヒュペリオンを、ヨルムンガンドが窘める。

「ふあつ？ ああ、ごめんねえ、むにゃむにゃ」

言った傍から眠ろうとするヒュペリオンをよそに、ヨルムンガンドも姿を変える。

それにしても……頭が六つある姿に変化したとしたら、それは人間と言えるのだろうか？ そんな私の疑問に反して、ヨルムンガンドはきちんと頭は一つ、手足はそれぞれ二本ずつという標準的な人間の姿になった。

地面に付きそうなほど長い灰色の髪を首の後ろで六つに分けて、髪そのもので結^ゆって垂^たらし、体の線がはっきりと浮き彫りになる薄い灰色のブラウスとズボンに同色のコートを重ねていた。

眦^{まなこ}が少し垂れ気味で、黒一色の瞳にはあまり覇^は気が感じられない。

どことなく顔から読み取れる感情の色が薄く、ヨルムンガンドの生来の自己表現の希薄さがよく

表れている。

「むぐぐぐぐ……ヨルムンガンドまで」

「アレキサnderよ、いつもの通りお主の負けだ。意地を張らずにさっさと自分の心に素直になれ。いい加減、我もお主のその態度には飽きたというか、呆れておるのだぞ？」

「バハムートの言う通りだ。ドラゴンがまたいつ死ぬとも限らぬ以上は、前のように後悔しかねない真似^{まね}は慎^{つつし}みなさい」

バハムートとリヴァイアサンは、まるで父母の如くアレキサnderを諭すと、その姿を人間のものへと変えてゆく。

バハムートは鱗と同じ闇よりも深い漆黒のローブを纏^{たぐ}った逞^{たくま}しい青年の姿を取っている。

私より頭一つ高い長身で、引き締まった筋肉の束を纏った見事な肉体を構築していた。変わらぬ銀の色彩に染まった瞳には、底知れぬ知性の煌めきが瞬いている。

巨大な岩石から掘り上げたような威厳を感じさせる顔立ちで、決して取れないと思わせる深い皺が眉間^{みま}に刻まれていて、おまけに何故か視力を矯正する黒縁の眼鏡^{めがね}を掛けていた。

ふむん、お洒落^{しゃれ}か？ よもや老眼の類ではあるまいが……

眼鏡はともかくとして、人間に姿を変えたバハムートには、人間のどんな国家の国王や皇帝であろうと声をかけることさえ憚られる大賢人か超越者といった風格がある。

リヴァイアサンも威厳に満ち溢れた姿であった。

底を見通せぬ深い海を写し取ったような青く長い髪を、黄金や白金など多種多様な宝石類で飾られた髻で結い留め、首元や手首にも豪華と言う他ない装飾品をつけている。

これだけ飾り立てればかえって品性を損ないかねないのだが、リヴァイアサンに限っては、これらの装飾品でなければ彼女の美貌と品格に負けてしまう。

「まはり、神秘的な着い瞳は心の奥底のみならず、魂まで見通すかのような輝きを秘めている。穏やかな笑みを浮かべる唇は、そこから零れる言の葉一つで、全ての人間の心を奪えそうなほどに妖しく美しい。」

リヴァイアサンの鱗や皮膚が変じた衣服は、龍吉やその娘の瑠璃が着用している前合わせの衣服に酷似していて、豊満な乳房と臀部が薄い生地を大きく押し上げ、代わりに腰の部分に関しては大胆なまでにくびれている。

蠱惑的な肉体の持ち主であるが、見る者に肉欲を抱かせぬ圧倒的な風格と美貌を併せ持っている。ふむん、強いて言えば、龍吉を百倍ぐらい威圧的で勝ち気にすれば、似ていない事もないかもしれない。

皆が次々と人間の姿に変化した事で、ただ一柱取り残された形になったアレキサンダーは、むぐぐぐ、むぎぎぎ、と、女性にあるまじき唸り声を出している。

「ほれほれ、後はお主だけじゃぞ」

「早く決めなよ、決めるのおっそ〜〜い」

リヴァイアサン達にはやし立てられたアレキサンダーのこめかみに、太い血管の筋がビキビキと浮かび上がる。はてさて彼女の心中には、一体どのような感情の嵐が吹き荒れている事やら。

アレキサンダーはちらっと私の方を見て、鼻息を荒くする。

私を見てどんな決断をする気だ？

「ああもう、いつもこうだ。私ばっかり、こう……なんと言うか、除け者にされると言うか、頑固者扱いされると言うか、もう、もうもう！」

まさに駄々をこねる子供のように地団太を踏んで、アレキサンダーは洪々人間へと姿を変えはじめる。

彼女の外見には、気性が荒く傲岸な性格がよく表れていた。

銀糸だけで編んだような一枚布を全身に緩く巻いた姿で、四肢の付け根や大きく揺れる胸の谷間を大胆に覗かせていた。少し露出が多くはなからうか。

鱗と同じ銀色の髪は膝に届くほどに伸び、腕や首、腰に足、耳、額と、全身のあらゆるところに各種の寶石や貴金属の装飾品を何重にもつけている。身を飾る品だけで地上の人間の王国を全て買えそうだが、これらは全てアレキサンダーの鱗や皮膚が変じたものだ。

目尻は吊り上がり、獐猛な光を帯びた金眼は、己の存在への絶対的な自信から他者への嘲りを隠そうともしていない。

立ち読みサンプル はここまで

あどけなさの残る顔立ちは、これ以上ないほどに整っており、その十代前半から半ばに見える幼さに反して、淫らとさえ言える体つきをしていた。

「まったく、竜以外の姿になるなど滅多にしないんだからな」

アレキサンダーはきめ細かな頬をぶくつと膨らませている。

皆の意見にアレキサンダーが根負けし、不機嫌になって怒りを撒き散らす——これも私達からすればいつもの光景である。

ぶりぶり怒るアレキサンダーは放ったまま、リヴァイアサンは私の目の前まで歩いてくると、私の顎を掴んで左右上下を向かせたり、べたべたと肩や腹を撫でたりしはじめた。

リヴァイアサンが動く度に、身に纏う装飾品がしゃらしゃらと音を立てるが、それは耳障りではなく、計算し尽くして配置された風鈴のように美しい音色であった。

「見たところ健康そのものだのう。何より、我らの知るお主よりも活力に満ちて見える。お主にとって、勇者達により齋された死は、生まれ変わる事を経て祝福とも言える効果があったようじゃな。もっとも、兄弟を殺された事に関しては、業腹じゃが」

「そうだな……殺された件に関しては私がそのつもりだったから成立した話だ。私の前に立った彼らは、むしろ返り討ちにされると覚悟していた様子だったからな。私を殺せた事……あるいは殺してしまった事は、勇者達にも予想外だったろう。何しろ、私の心臓を勇者の剣が貫いた時、ひどく驚いた顔をしていたからね。まさに青天の霹靂といった具合にね」

